

アーシェラ・K・ル・グインとトリックスター

渡 辺 忠 夫

あの Arren の “a mage is a trickster⁽¹⁾” の言及はもとより Ged の本性をあらわすばかりではなく、*Tehanu, the Other Wind* への修正、改作、補述の契機となった問題をはらんでいると言えよう。今すこしコンテクストを明示しておきたい。

"The mind of the magician takes delight in tricks, a mage is a trickster. Sparrowhawks disguise in Hort Town, which had so troubled Arren, had been a game to him; a very slight game, too for one who could transform not just his face and voice at will but his body and very being, becoming as he chose a fish, a dolphin, a hawk⁽²⁾"

“trickster” はことわるまでもなく、二義性を両有している。神聖と非神聖、英雄と非英雄、創造と破壊、正義と詐欺、秩序と混沌、知性と道化、柔軟と固定⁽³⁾。Ged はまさしくこの二義性の両有者であると設定されていると思われていた。しかし、作者ル・グインは明示してはいたが Ged に統合力、復元力、破碎力を与えてはいなかった⁽⁴⁾。したがって、*Tehanu* の創作まで 18 年間の沈黙が不可避となったと言ってよいであろう。

つまり、例の三部作 *A Wizard of Earthsea, The Tombs of Atuan, The Farther Shore* で Ged をトリックスターにしたせいで修正を意図するはめになった。逆に言えば、18 年間の見直しで Ged をトリックスターにしたとことよって *Tehanu, The Other Wind* を書くはめになった。アメリカ文学史にかならずいづれ論争の主題をあたえる作品になることは疑いのないことであると思われる。

ところで、Ged のトリックスターの問題にもどることにしたい。

Arren 後の Lebanne 王が Ged のトリックスターを直視したのはすでに記述したように Hort Town での Ged の “disguise” に当惑された時である。“disguise” の理由づけを Arren につきのように説明する。

"Arren, there are people in Wathort who know me pretty well; so watch me that you know me." When he straightened up there was no scar on his face. His hair was quite grey; his nose was thick and somewhat snub; and instead of yew staff his own height, he carried a ward of ivory, which he tucked away inside his shirt. 'Dost know me?' he said to Arren with a broad smile, and he spoke with the accent of Enlad. "Hast never seen thy nuncle before this?" the transformation troubled him more, not less. It was too complete; this was not the

Archmage at all, this was no wise guide and leader⁽⁵⁾.

極西の島、Selidor に Ged と Arren が来た目的は世界の “balance” を崩した例の Cob の行方を捜し、斗い、回復することであった。しかし、Selidor 島のいずれに居るのか Ged にもわからなかった。しかし、適切な案内役が現われた。あの竜の Orm Embar である。Ged と Orm Embar は旧知の関係にあった。“Dragonlord” でもある Ged はかつて Orm Embar に “the the Ring of Erreth-Akbe” の在り処を教えてもらったことがある。

Orm Embar は今はひたすら “竜王” の Ged の助力がほしかった。なぜか。Orm Embar はその事情をつぶさに語っている。

"In the west there is another Dragonlord; he works destruction on us, and his power is greater than urs." …"Even than mine. I need thee thee: follow in haste…"⁽⁶⁾

“another Dragonlord” とは誰か。もとより Cob である。Havnor の魔術師 Cob とはいかなる存在か。みずからの記述によると、こうなろう。

I have seen death now, and I will not accept it. …I took the plenish Lore again, but found only hints and smatterings of what I needed. So I reweve it and remade. Made a spell—The greatest and last! …Alone of all men in all time I am Lord of the Tow Lands⁽⁷⁾.

Ged と Cob の、斗争は不可避である。“balance” が勝利するか。不死が正当化されるか。当然の死斗であろう。Cob の敗北である。Ged が開いた扉を閉じ、世界を一つにする回復の呪文を唱えた。

"Be thou made Whole!" he said in a clear voice, and his staff he drew in lines of fire across the gate of rocks a figure: the Agnen, the rune of Ending, which closes roads and is drawn on coffin lids. And there was then no gap or void place among the boulder. The door was shut⁽⁸⁾.

Cob に最終の言葉、“Go free” を指示し、Arren と “Dry Land” から帰国への道をたどった。

しかし、破綻が生ずる。しかも、トリックスターの設定、構図においてある。Ged が不老不死を唱導し、世界の “balance” を崩した Cob との斗いで、傷つき、魔術を喪失したことだけではなく、家庭、故郷の回帰を願望していたことである。ゴント島回帰のことはすでに予告されていた。つまり、Tenar, Ogion とのありきたりの生活のくり返しである。

"Not in Havnor would I be, and not in Roke. It is time to be with power. To drop the old toys, and go on. It is time that I went home. I would see Tenar. I would see Ogion, and I speak with him before he dies, in the house on the cliffs of Re Albi, I crave to walk on the mountain of Gont, in the forests, in the autumn when the leaves are bright⁽⁹⁾.

しかも、つぎの文は Ogion の生活を習い、Arren との別離を率直に告白している。

"…Re Albi", …"there lives my master, Ogion… He tends his goats and gathers herbs, and keeps his silence… He used to go up into the forest alone, in the late summer and autumn. So he came first tome, When I was a brat in a moutain village, and gave me my name. And my life with it." ……

'There, 'sparrowhawk said looking at Arren with a strange mocking look,' if I could ever

go back there, not even you could follow me⁽¹⁰⁾?

予告のごとく、Cob との斗争で傷つき無力となり、竜の長老 Kalessin に助けられて帰って来た島はまず Roke であった。さらに Roke から故郷の Gont 島の “immanent grove” で消息を絶った。Roke の院長、竜王、賢者の地位を捨て、一介の羊飼いになってしまったことである。

問題は Ged が Gont に帰国し、自然回帰の生活を送ったことである。改革、破碎しなくてはならぬ問題があったはずである。

Roke 学院の女人禁止、魔術の世界の解消、竜と人間の融合、女性差別の廃絶の使命があったはずである。つまり、Roke の家父長体制男女の格差の “breakthrough” をはからなくてはならなかった。しかし、この問題は *Tehanu, the Other Wind* の創作においてあらためて提起され、転開しなくてはならなかった。

ル・グインはあえて Ged をトリックスターにすることによって “創作意図” を崩す結果をみずからまねいたと言ってよいであろう。

三部作の破綻である。したがって 18 年の無作為、内省、改作のもとに *the Other Wind* に問題が止揚されたと推測される。

破綻のゆわれは Ged を勇者として活躍させすぎ、しかも Re Albi の Ogion の東洋のエートスに近接させしすぎたことではなかろうか。

Ogion はいわゆる “fantasy” のなかでの賢人にすぎない。三部作では異色の人物であった。中国の老子と準えてもよいであろう。

自然の山水、草木、遊歩を好み、薬草を摘み、山羊、牛を育てる自然人、しかも Roke の長に推されながらも拒絶した魔術師。あわせて、Ged、Tenar と養女の Therru を育て、Roke 解体を予言した賢者である。

Ogion の賢者としての才質はこれだけにとどまらない。くり返しになるが、すでに *Tenanu* において Roke 世界の改革を予言し、その破碎者を Therru と Tenar と遺言していることである。

"Teach her, Tenar," he whispered. "Teach her all—Not Roke. …To bring her here—too late?" …"Teach her!" …"All changed! —Changed. …Tenar! Wait—waite her, for—"⁽¹¹⁾

しかし、Ged には Tenar、Therru による転換の予言はできた。が Ged は “trick” による魔法の時代ではなくなることはすくなくとも予解はしていたのではないかと推測される。

この予解はあくまでもトリックスターの半面にとどまり、女性がつぎの世代の解放者となることは Ogion のごとく予言できなかったことは客観的事実である。しかし、Ged ばかりではなく、作者ル・グインにも才質があったが創作までには展開しなかった。

しかし、トリックスターを Ged に設定し、Tenar、Therru、Irian、Alder を補述し、人間と竜との斗争から共生に展開させた作術は単なるファンタジーとは言いがたいはずである。この展開はすでに論述したことがあるのでこの小論では省略したい。これからは魔術からの解放と言う主題のもとにル・グインの創作意図を根源から見直してみたいと思う。

補述しておきたいことが一つある。Roke の “School” に女性が一度入学した例があることで絶対

の女人禁制の学院ではなかったことである。しかし、例外があった。竜の長老、Kalessin の娘、Orm Irian である。ありようはこうである。

"This was some eight years ago. She came from Way, disguised as a young man, wanting to study the art magic. Of course her poor disguise didn't fool the Doorkeeper... Ye he let her in, and he took her part...⁽¹²⁾

Orm Irian がいかなる目的で Roke の学院で魔術をあえて勉強しに来たのか。“守りの長”が、“disguise”を見破っておきながら許可したのはなぜなのか。作者の意図はどこにあったのか。これらはいずれも不明ではある。しかし、この段階で言えることは Irian、Tehanu があの二作品での主役であり、Roke の家父長社会、男女の格差の解放をになわせられており、しかも人間と竜の斗争の和解者となっていることである。作者の不自然とも言える補述である。

Ged、Tenar は問題の提起と家庭回帰の世代であり、Irian、Tehanu は社会、政治改革の推進と共生の世代の主導者と作者は位置づけていると思われる。もとより Havnor の若き王 Lebanne の合意、要請があることが当然の構図とされている。落差があることは問題ではある。この問題はいずれあらためて論ずることとしたい。

注

- (1) テキストは原則として Le Guin Ursular, *The Earthsea, Quartet*. Penguin Books, 1993. を使用した。 *The Farthest Shore*. p. 420.
- (2) Ibid, p. 420.
- (3) 『トリックスターの系譜』ルイス・ルイド、法政大学出版局、2005。『アフリカの神話的世界』山口昌男、岩波新書、1976。
- (4) アースシーシリーズの世界で Ged を英雄、賢者、竜王としての側面を主題としたせいで Roke の社会矛盾、男女の格差、竜と人間の斗争、不老、不死を問題にしきれず *Tehanu, The Other Wind* で修正しなくてはならないことになったと言えよう。これらの問題はすでに拙論、「アーシュラ・K・ル・グインと他者からの関心と共生」、「アーシュラ・K・ル・グインと異形者の破砕のエートスと共生」『中京大学外国文学研究』2006. で言及しているので参考されたい。
- (5) Ibid, pp. 336-337.
- (6) Ibid, p. 419.
- (7) Ibid, p. 461.
- (8) Ibid, pp. 466-467.
- (9) Ibid, p. 441.
- (10) Ibid, p. 421.
- (11) Ibid, pp. 500-502.
- (12) *The Other Wind*. p. 108.